

## 夜の闇に光をともし

今年の1月10日に急性肺炎で奥さんを亡くされた友人Sさんから、お手製のクリスマスカードとお便りを頂きました。心を深く打たれましたので、許しを得て一部分をご紹介します。

憲子は私と娘にとり、その存在は全てでありました。私達家族は40年に及ぶ海外生活にあって、お互いがその存在を強く必要とし、強い絆で結ばれていました。特に妻の生き方は年令とともに研ぎ澄まされ、真の優しさを持った素晴らしい人間として生きました。彼女は本当に心の美しい人でありました。それは目の美しさによってよく現れています。

私達夫婦は結婚以来、実によく喧嘩をしました。その度に最後は私が謝りそれで解決するのですが、口では喧嘩をしながらも、その大きな目では私を赦しているのがよくわかるのです。結婚当初に妻はこう言いました。「結婚とはお互いを見つめるのではなく、同じ方向を見つめて生きることよ」と。私達二人はその生活を実践したと思います。私達の結婚生活は今振り返るとき、妻の大きな愛で支えられた宝石のように輝いたものでありました。

妻は晩年「人間の死は突然、思いもかけない時にやってくるものよ」と私によく言うておりました。「だから今生きているこの時を大切にしたい。今を大切に生きるためにはどのように生きれば良いのか」を二人でよく話合いました。最終的な結論は「与えられて生かされているこの命にただ感謝して生きる、それ以外の生き方はないよね」というものでした。

彼女の人生はひと言で表現するならば、「他者への徹底した優しさと思いやりに溢れたものだった」に尽きると思います。特に家族への愛は溢れるばかりのものでした。その彼女の生き方の末に、彼女の死があつたのです。私は悲しみにくれながら、「それならば、そこに大きな意味が隠されているのではないか」と思い始めました。

「誰でも避けられない死において、憲子は家族への優しさを示してくれた。道標（道しるべ）となって私達家族を待っているのではないか。——そうであれば、彼女の死は家族にとって大きな希望と喜びを約束していることになります。これから温かい光の中を歩いて、憲子に会いに行くのだ」との思いに至りました。これこそが私が信じる永遠の命ではないでしょうか。

お便りは「まだ悲しみの中にありますが、少しずつ前を向いて歩いております。残された人生を元気溘刺に、希望に溢れ、日々感謝して生きること、これこそ妻憲子がくれた彼女の愛、優しさと思いやりに応えていくものだ、と思うようになりました。」と結ばれていました。

イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスが近づきました。世界の片隅、ユダヤの小さな田舎町ベツレヘムの宿屋の馬小屋でひっそりとお生まれになったのです。出身地で住民登録をせよとの政府の命令で、宿屋はどこも満員、金も力もないヨセフとマリアには家畜小屋に泊まるほかなかったのです。その夜生まれた赤ん坊は、飼い葉桶に寝かされました。こんな貧しい出産しかさせられなかったヨセフは、夫として惨めな思いに打ちのめされていたことでしょう。



ところがわびしい家畜小屋に、突然羊飼いたちが誕生を祝いに来てくれました。彼らが野宿しながら夜通し羊の群れの番をしていると「救い主が誕生して飼い葉桶に寝かされている」と天使が知らせてくれたので

す。夜空に天使の大合唱が響きました。彼らは急いで家畜小屋を見て回り、乳飲み子を探し当て大喜びしてくれました。またはるか東の国の学者たちも、暗い夜空に輝く星に導かれて夜の旅を続けて拝みに来ました。夜がクリスマスの舞台でした。

人生の暗闇——これは先の見えない不安・惨めな貧しさ・失敗や挫折の恐れ・病いの苦しみ・絶望をもたらす死等でしょう。そして人生の幸福を奪うものとして恐れられています。私達は何とかして闇に襲われないように、身を滅ぼされないようにと懸命に努力し、また祈願を捧げますが、打ちのめされて悲惨な生涯を閉じる場合が多いのです。

しかし皆さん。最愛の妻を失った深い悲しみの闇の中で、神さまはSさんの心に、奥さんの愛が指し示す希望と喜びを気付かせてくださいました。そして「天国での再会

を目指して、希望にあふれ、日々感謝して生きて行きます」という手紙を書くまでに、導いてくださったのでした。愛の神さまは、人生の闇の中に救い主を生まれさせて、愛、喜び、平安、希望をもたらしてくださるお方なのです。夜空を通して、救いを告げる天使の声と賛美の歌声を、私たちも、心の耳を澄ませて聞きたいものです。

**“暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、  
我らの歩みを平和の道に導く“ （聖書）**